

恋人の子宮

紀卿

温かな子宮、生臭い羊水。

揺られ、眠り、

僕は君の子になつた。

そしてへその緒を通じて、
宿り虫のように
君の養分をむさぼる。

ああ、それが、僕——

醜く、哀れな僕。

僕は君のすべてを知つていた。
ぬめる内膜の感触、

腸がうねる音、心臓の鼓動、
もやに包まれた子宮の闇。

でも、本当は何も知らなかつた。

君の顔も、膚も、腹も、
脚も、髪も、乳房も。

僕は何ひとつ知らなかつた。

こんな僕は、やっぱり君の子にはなれないよね。

だから、殺してくれ。

潰して、絞つて、引きさいて、

僕をぐちやぐちやにして、

骨まで、肉まで、魂まで。

へその緒なんていらない。
ぬくもりなんて偽りだ。

愛なんて嘘つぱちだ。

僕を潰して、

ぐちやぐちやに潰して、
もう一度子宮に戻して、
血と羊水と一緒に、流してくれ。
ただの塊でいい。

もう何もいらない。

顔も声も、誰の子でもなくでいい。

君の中の

黒くてぬるい穴に
沈めてくれ。

全部、終わらせて。

君の子宮ごと、僕を終わらせて。